

## 第50回新潟大腸肛門病研究会

日時 平成14年12月14日(土)  
午後2時30分～5時30分  
場所 新潟グランドホテル 5階 常磐の間

### I. 一般演題

#### 1 Proliferation index as a cellular marker of metastatic potential and prognosis in colorectal carcinomas

Vladimir Valera · Naoyuki Yokoyama  
Mikako Kawahara · Beatriz Walter  
Haruhiko Okamoto · Takeyasu Suda  
Katsuyoshi Hatakeyama

Department of Surgery, Division of  
Digestive and General Surgery,  
Niigata University

【目的】本研究は、大腸癌における細胞増殖能の臨床的意義の解明を目的とした。

【方法】1995年から1997年までの大腸癌切除106症例の原発巣代表切片を対象とした。上皮系マーカーとして抗サイトケラチン8抗体CAM5.2, 増殖細胞の指標として抗Ki67抗体MIB1を用いて、二重染色を行った。細胞増殖能はProliferation Index (PI) = MIB1陽性細胞数/CAM5.2染色陽性癌細胞数として算定した。

【結果】PIはT, N, M, Stageの全てと有意な相関を示した。リンパ節転移に関する多変量解析では、PIと1yが独立した転移既定因子であった。生存曲線の単変量解析において、高増殖能群(PI > 66%)は低増殖能群(PI < 33%)に比べ有意に予後不良であった。多変量解析でもPIは独立した予後既定因子であった。

【結語】大腸癌において癌細胞の増殖能は、リンパ節転移および患者予後の指標として臨床的意義を有する。

#### 2 5-FUにて消失した大腸癌肝転移の2症例

丸山 聡・北見 智恵・二瓶 幸栄  
田宮 洋一

県立吉田病院外科

今回われわれは大腸癌多発肝転移症例に対して5-FU系薬剤の投与によりCRが得られ、現在まで無再発のまま経過観察している2症例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

〔症例1〕42歳男性。直腸癌、同時性多発肝転移(H2)に対して原発巣に対する手術後、5-FUを用いた肝動注化学療法施行。術後3ヶ月のCTでCRとなり、術後2年5ヶ月経過した現在も無再発生存中である。

〔症例2〕75歳男性。横行結腸癌、同時性多発肝転移(H2)に対して原発巣に対する手術後、3年間5'-DFUR 800mg/day投与。術後8ヶ月のCTでCRとなり、術後3年3ヶ月経過した現在無再発生存中である。なお、この症例は5'-DFURの5-FUへの変換酵素であるdThdPaseが切除標本の免疫染色で陽性と判定され、非常に興味深い症例である。

#### 3 全身化学療法により著効(CR)が得られた直腸癌多発肝転移の1例

新国 恵也・清水 大喜・島村 和彦  
西村 淳・河内 保之・清水 武昭

新潟県厚生連長岡中央総合病院外科

症例は57歳男性。生来健康であったが平成12年6月初旬から便秘傾向となり嘔気と腹痛が出現したため6月28日当科を受診した。身長164cm, 体重56kg。腹部全体に膨満がみられ下腹部に軽度の圧痛を認めた。腹部レントゲン写真で、拡張した腸管内にガス像と鏡面形成をみとめ腸閉塞と診断した。大腸内視鏡検査では、直腸S状部に全周性狭窄をきたす2型腫瘤を認め生検でgroup V, 高分化腺癌と診断された。血液生化学検査ではCEAが49.3ng/mlと異常高値を示す以外、異常値はなかった。CTでは肝両葉に径1～3cm大の低吸収域が多数存在し右横隔膜下には腹水の貯留が見られた。その他の臓器に遠隔転移はみられ